

近畿病院図書室協議会年次統計4年間の集計

林 伴 子 (社会保険神戸中央病院医学資料室)
松 本 純 子 (住友病院医学図書部)

1. はじめに

日常の図書室業務を客観的に把握する手段として、統計をとることは有用である。統計には大きく分けて、図書室の現象を量的に把握するもの(蔵書数、新規購入図書、製本雑誌数、現行受入雑誌数、etc.)と、図書室の機能を質的に把握するもの(利用者数、貸出冊数、相互貸借件数、レファレンス件数、etc.)がある。これらは、図書室のマネジメントの上からも、予算要求、運営上の改善、さらには新しい企画を行う場合の資料として重要なものである。しかし、各図書室での統計の実施状況はまちまちであり、また、行っていないところもかなり多いのが病院図書室の実態であった。

そこで、協議会としての全体的な動向を知り、各病院図書室の実情を把握するため、また、病院図書室に対する各方面からの問合せにも対処できるように、スタンダード化された統計の実施を試みることにした。

初年度は、日本医学図書館協会(JMLA)年次統計を参考にして項目を設定し、1980年4月～1981年3月を対象期間として、各図書室に提出を依頼した。1981年度より、不備な点などに若干の変更を加え、今年度(1983年度)までに4回の年次統計の集計を行っている。

今回、今までの集計で得た結果を報告する

とともに、今後の年次統計のあり方について考えてみたい。

2. 対象期間ならびに調査項目

対象期間は、病図協の年度に合わせて、各年の4月初から3月末までとし、1980年度を昭和56年12月、1983年度を昭和59年6月に行い、その間、計4回を重ねた。

調査項目は図1の通りである。

3. 回収状況

回収状況は、いずれかの項目に回答があったものは、1980年度43機関(会員数54)、1981年度40機関(同56)、1982年度34機関(同60)、1983年度38機関(同62)であった。初めから、不参加として連絡があった機関も、各年2～3あった。

回答率の最も良かった項目は、施設、職員に関するもので、各年とも、ほぼ90%以上の回答率であった。

逆に、回答率の悪かったのは、利用に関する項目で、特に院内貸出冊数の把握が、充分に行なえない状況にある施設が多いようである。

4. 集計結果

1) 施設

平米数から見れば、各年度間には、さほど差はない(表1)。しかし、併設の場合が多

病院番号 _____

病院図書室年次統計

1 病院名 _____ 病床数 _____ 図書室正式名称 _____

2 施設 i 独立したスペースを持つ
 ii 独立したスペースを持たない () と併設

面積

延面積	事務室	閲覧室	書庫	その他
㎡	㎡	㎡	㎡	㎡

3 職員所属 所属長職名

a) 職員数

男	女	計	司書	専任	兼任 (兼務内容)	アルバイト フルタイム	パート
					()		

b) 経験年数

1年未満	5年未満	10年未満	10年以上

4 図書委員会 有 : 構成人員 _____ 年間開催回数 _____ 回

無

5 蔵書

a) 累計

b) 年間統計

単行書		製本雑誌		単行書	製本雑誌	雑誌受入title数		
和	洋	和	洋	受入数	受入数	和	洋	計

6 資料購入費

総額	単行書	雑誌	製本費	その他

7 利用

a) サービス対象人員 職員 { 医師 _____ 看護婦 _____ 技術職 _____ その他 _____ } 職員外 { 看護学生 _____ 患者 _____ その他 _____ }

b) 利用に関する規定 有 : 名称 _____

無

c) 院内利用 貸出冊数 (年間) ※ 長期貸出は別掲

単行書	製本雑誌	未製本雑誌	区別していない場合

図1 調査項目 (続く次頁)

長期貸出冊数累計	長期貸出先
	医局・検査部・薬剤部・医事課・栄養（給食）・ その他（ ）

d) 相互利用

貸				借		
現物	複写	謝絶	現物	複写	謝絶	
件	件	枚	件	件	件	

e) レファレンス・サービス

文献検索		事項調査	その他
マニュアル	機械		

8 整理

a) 分類法 NDC NLMC その他（ ）

b) 目録種類 書名目録 分類目録 著者目録 件名目録 その他（ ）

9 視聴覚資料・機器

a) 資料累計

マイクロ資料 film fish	映画 フィルム	スライド	録音テープ カセットオープンリール	レコード及 ビソノシート
ビデオカセット		その他:		

b) 機器	マイクロ機器	映写機
	複写機	タイプライター
	データ・ターミナル	その他

10 図書室出版物

書名	発行		
	年間発行回数	部数	備考

11 二次資料

Cumulated Index Medicus・Index Medicus・Excerpta Medica（ ）種・
Science Citation Index・Current Contents(Life Science, Clinical Practice)・
医学中央雑誌・各主題別分献集・雑誌総合目録（文部省）・医学雑誌総合目録（JMLA）・
現行医学雑誌所在目録（JMLA） 年版・雑誌記事索引（医学・薬学編：国立国会図書館）

図1（続き）

表1. 図書室面積

年度	1980	1981	1982	1983
0 ~ 50	6	7	6	8
51 ~ 100	14	9	9	10
101 ~ 200	12	12	8	9
201 ~ 300	5	5	4	4
301 ~	1	4	4	5
最大/最小	564/ 25	580/ 22.5	562/ 25	562/ 25

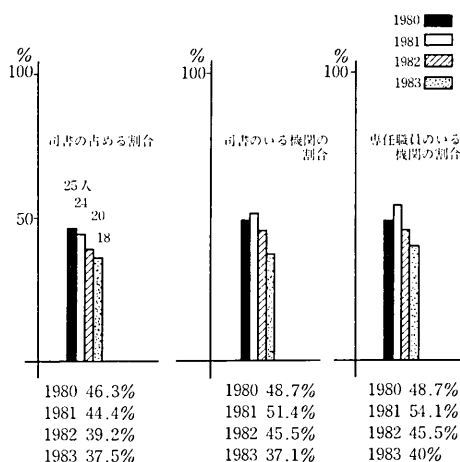


図2 職員

く、'80年度23機関（57.5%）、'81年度13（32.5%）、'82年度10（29.4%）、'83年度11（28.9%）と、率としては、年々低くなってきているが、 $\frac{1}{3}$ は、病歴室や、医局、会議室と併設である。また、一方では、500 m²以上の大きなスペースを持つ図書室もあった。

2) 人 員

平均職員数は、各年平均 1.4~1.5 人とそれ程変化はない。司書の勤務する機関数、あるいは専任職員のいる機関数は、1981年度、司書のいる機関の割合、51.4%、専任のいる機関の割合 54.1% をピークとして、%は減ってきている（図2）。しかしこれは、1981年

表2. 資料費

年度	1980	1981	1982	1983
0~99	1			
100~199	3	3	5	3
200~299	4	3	3	7
300~399	5	4	2	4
400~499	4	3	2	1
500~599	3	1	2	3
600~699	4	4		2
700~799		2	1	3
800~899			2	1
900~999	4	2	1	1
1000~1099	1	1	1	2
1100~1499	1	5	3	3
1500~2000	1	1	1	1

度に、司書、あるいは専任職員がいた機関の一部から、1983年度には回答が得られなかったことに因るものと思われる。従って、現状としては、さほど変わっていない。

しかし、専任職員の占める割合が約半数であるという事実は依然として残り、協議会活動に、積極的に参加してゆく上での、各担当者の制約の多さも、この結果からうかがえる。

兼務内容としては、病歴管理、医局事務が多かった。

3) 図書委員会

図書委員会のある機関は、1980年度26機関（60.5%）、1983年度24機関（63.2%）である。

構成員は、2人のところから26人のところまで、開催回数も、年1回のところから12回のところまで、各機関の事情によって、まちまちであった。

4) 資 料

資料費は、100万円台から400万円台が多く、各年とも半数がこの間に集まっている。また、900万円以上という、多額の資料費を有する機関も、かなりの割合であった（表2）。

単行書の蔵書数は、1001~3000冊台が多

表3. 蔵書数（単行書）

年度 冊数	1980	1981	1982	1983
～1000	6	6	5	6
1001～3000	14	9	12	14
3001～5000	8	9	7	7
5001～10000	9	8	5	5
10001～	3	2	3	3

表4. 年間単行書受入冊数

年度 冊数	1980	1981	1982	1983
～50	8	5	6	12
51～100	10	1	3	4
101～150	6	6	6	5
151～200	2	3	1	2
201～250	2	1	5	4
251～	10	10	9	7

く、年間の単行書受入数は、251冊以上のところが多かった（表3，4）。

資料費との関係を見てみると、全体にバラついていて、単行書の受入冊数には、資料費の多少はそれほど関係はないようである（図3）。例えば資料費が年間2,000万円あって、受入単行書は50冊という病院もある。また、すべてが購入ではなく、寄贈図書が多い施設もあるのではないかと考える。

現行雑誌受入タイトル数は、151～200タイトル台が多い（表5）。雑誌の受入タイトル数と資料費との関係を見ると、前述の単行書とは異り、だいたい比例している（図4）。

病院図書室では、スペースも限られていて、資料の所蔵量については、それ程多くを望めない。雑誌の受入タイトル数についても、今後さほど増えるとは思えない。また、続々と出版される新刊雑誌の購入についても、一病院では、とても購入しきれものではなく、

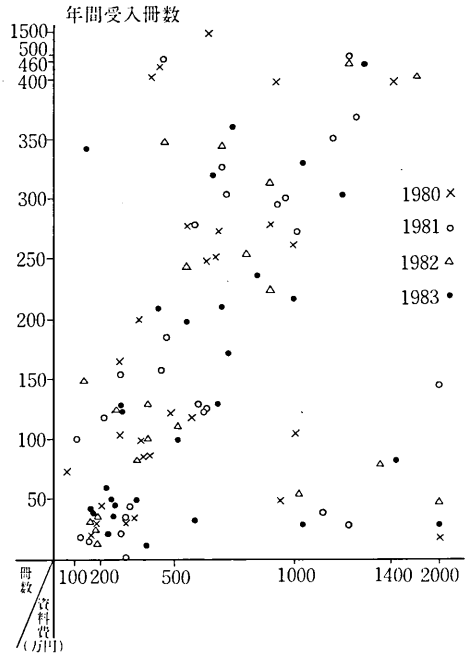


図3 単行書の受入冊数と資料費との相関

表5. 現行雑誌受入タイトル数

年度 タイトル数	1980	1981	1982	1983
～50	7	5	5	5
51～100	9	7	8	9
101～150	6	4	2	2
151～200	8	10	8	13
201～250	5	5	4	4
251～	5	4	5	5

組織として、分担収集など、不足を補う何らかの方法を検討すべきではないかと考える。

5) 利用

利用統計は、中でも特に貸出統計は、出していないところが多いようで、回答率が低かった（表6）。

夜間、あるいは休日の無人になった状態での利用が多いことも、貸出冊数の正確な把握を困難にしている一因と考える。しかし、図

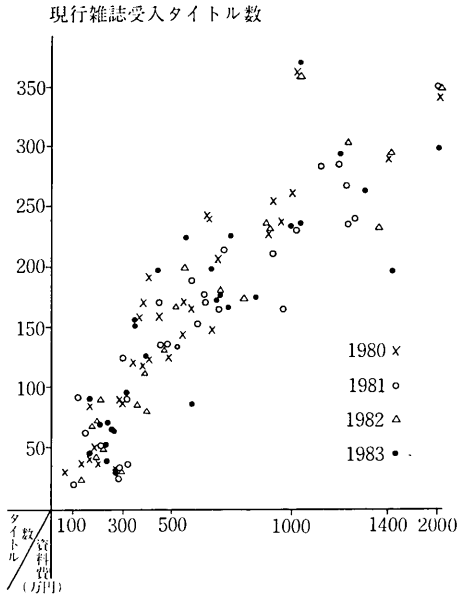


図4 雑誌タイトル数と資料費との相関

表6. 貸出(単行書)

年度	総冊数/回答施設数	月平均冊数
1980	6203/8	64.6
1981	8962/10	74.6
1982	6540/11	49.5
1983	6007/13	38.5

書室での、一日の業務量を省みる時には、重要な資料となるので、各図書室の状況に合わせて統計をとってゆく必要があるのではないだろうか。

また、未製本雑誌については、必要文献を複写して利用することを前提として、一切の貸出を認めないという施設もあった。最近では、病院内に複写機の無いところはほとんど無く、その上、未製本雑誌は紛失しやすいところから、今後、同じような方針を打ち出す機関も出てくるのではないかと思う。

長期貸出は、1/3以上の機関で行っていて、

表7. 長期貸出

年度	施設数	総冊数	平均冊数
1980	15		
1981	16	7959	497.4
1982	25	11161	620.0
1983	29	11785	589.3

注1. 1980年度は、貸出冊数の調査は行なわなかった。

注2. 貸出冊数、平均冊数は回答のあった病院のみ ('81-16 '82-18 '83-20)

表8. 相互貸借総件数

年度	貸(件)	借(件)
1980	1390	6048
1981	1768	8785
1982	2957	7008
1983	2750	8363

('80-34.9%、'81-40%、'82-73.5%、'83-76.3%)平均冊数は、1981年度497.4冊、1982年度620.0冊、1983年度589.3冊である(表7)。長期貸出が行われたのが単行書であるのか雑誌なのか分けなかったのだが、仮りに単行書だけだとすると、多いところでは、蔵書の4割近くが長期貸出となっている。貸出先は、医局、検査部、薬剤部が多く、常に、手近に資料が必要な部門であるためであろう。それと同時に、図書室だけでは全ての書籍を管理しきれないという、スペース上の理由も考えられるのではないだろうか。

いずれにしろ、「目録上は所蔵している資料が実際には図書室にない」という、利用者からの不満の声が出る場合もあるだろうから、今後考えてゆかなければならない問題の一つであろう。

相互利用については、別に行っている相互貸借件数調査に準じた設問をとった。協議会全体の貸借件数は表8の通りであるが、これ

表9. 分類法

年度 分類法	1980	1981	1982	1983
NDC	19 (59.4%)	16 (48.5%)	12 (46.2%)	13 (41.9%)
NLMC	11 (34.4%)	9 (27.3%)	9 (34.6%)	11 (35.5%)
NDC, NLMC併用	1 (3.1%)	5 (15.2%)	5 (19.2%)	5 (16.1%)
その他	1 (3.1%)	3 (9.1%)	3 (11.5%)	2 (6.5%)

については、病図協総会の議案書で、より細かく報告しているのを参考にさせていただきたい。また、相互利用の推移に重点を置いた報告は、「近畿病院図書室協議会における相互貸借活動のあゆみ」として、加島民子氏（大阪回生）によってなされている（医学図書館29(3)：214～221, '82）。

レファレンス・サービスは、1980年度 37.2%、1981年度 35%、1982年度 41.2%、1983年度 44.7% の機関が行っている。しかし、クイック・レファレンスなどで、記録に残していない所もあるので、実際には、もっと多くの図書室で行っている。

レファレンス・サービスは、利用者の情報要求に対して司書が人的援助を与えることであるので、現代のような情報化社会の中の図書室では、ますます重要な機能となってくる。そのためのツールとして必要な二次資料の充実には、1983年度では、何らかの二次資料のある機関33(86.8%)であった。

文献検索のツールの中で一番多かったのは、「医学中央雑誌」30、次いで「Index Medicus」22、「Cumulated Index Medicus」17であった。所在を知るために必要な「医学雑誌総合目録」（JMLA）は23機関が所蔵しており、「現行医学雑誌所在目録」（JMLA）も、すべてが最新版ではなかったが、23機関で所蔵していた。

1984年3月には「医学雑誌総合目録・和文編」（近畿病図協）が完成し発刊された。

これと、先に発刊された欧文編は、加盟各機関は当然所蔵しているのので、相互利用を含めたレファレンス・サービスの実施には、今後の充実が期待される。特に、文献の機械検索は、データ・ターミナルを設置している図書室が増えてきているので、ますます増加するものと思える。

6) 整理

分類法は、NLMC を採用している機関が増加してきている（表9）。併用している機関も含めると、1983年度では16機関、51.6% と過半数を占めるまでになった。協議会会報で紹介したり、研修会で取りあげたりした結果であろう。

目録は、1983年度調査では、一種類しか作成していない所が最も多く、書名目録7機関、分類目録4機関であった。次いで、二種類の機関9、三種類の機関6で、書・分・著・件の4種類を作っているところは、わずかに3機関であった。担当者が少ない割には業務量の多い図書室では、全ての目録を作成する時間の無い所も多いと思えるので、各々の図書室で、利用者の要求に応えられるような工夫をすれば良いのではないだろうか。

また、コンピュータに目録を入力しているところもあったが、コンピュータの普及とともに増えてくるのではないかと考える。

5. おわりに

以上、各項目にわたっての集計結果を見て

きたが、4回の年次統計調査に応じた機関数は、延べ54機関である。しかし、全ての年度に回答を寄せたのは26機関であり、5機関からは、まったく回答が得られなかった。従って、年度毎に回答病院・回答数が異なり、協議会組織全体の統計としての資料にはなり得ていない。回答率が低いのは、職員の交替など、各機関それぞれに事情があるだろうが、統計業務に対する認識が、まだ不十分なせいもある。

また、年次統計の提出を求める側として、各項目に対する説明の不十分さ、あるいは、記入しにくい点があった事など、今後の課題

として検討を加えてゆきたい。また、提出時期が一定しなかった事など、各機関に対する配慮に欠けたことを反省している。

最初に述べたように、統計は、図書室を円滑に、機能的に運営してゆく上で重要な資料となる。繁雑な日常業務にとりまぎれて、つい客観的な視点というのを失いがちになるが、統計業務を通じて、図書室業務を客観的に把握し、さらに意欲的な図書室運営を行っていただきたい。

また、協議会全体としても、病院図書室の動向を把握し、組織の発展に役立てたい。

「病院図書室」執筆要項

I 本誌は病院図書室活動およびその関連分野に関する論文を私文により掲載する。

II 原稿

①原稿用紙は400字詰のものをを用い、長さは約30枚までとする。

②原稿の様式

イ 標題、著者名、所属機関名を記入し、著者名にはローマ字読みを付記する。
ロ 抄録をつけることとし、論文の要約を原稿用紙1枚(400字)以内に和文で記入する。

ハ 本文中の数字、欧文記入については一マス2字とし、又イタリック体やゴチック体を特に指定する場合には、その箇所の下線を引きその旨明記する。

③参考文献の記載要領

イ 雑誌論文

著者の姓名：論題、雑誌名、巻(号)：頁
(はじめと終わり)、出版年の順とする。

※著者名、欧文の場合は姓を先に、名はイニシャルのみ。

※雑誌名の省略、欧文誌は Index Medicus の Abbreviation に準ずる。邦文誌は原則として省略しない。

ロ 単行書

著者または編集者名：書名、版次、(翻訳者名)、発行地、発行所、出版年、引用ページ(はじめと終わり)の順とする。

III 校正は原則として編集委員会が行なう。

IV 別刷は当面予定していないので、本誌一部を増呈してこれに代える。

V 稿料は原則として支払わない。

VI 原稿送付先

〒612 京都市伏見区深草向畑町1-1
国立京都病院図書室
TEL 075-641-9161

以上